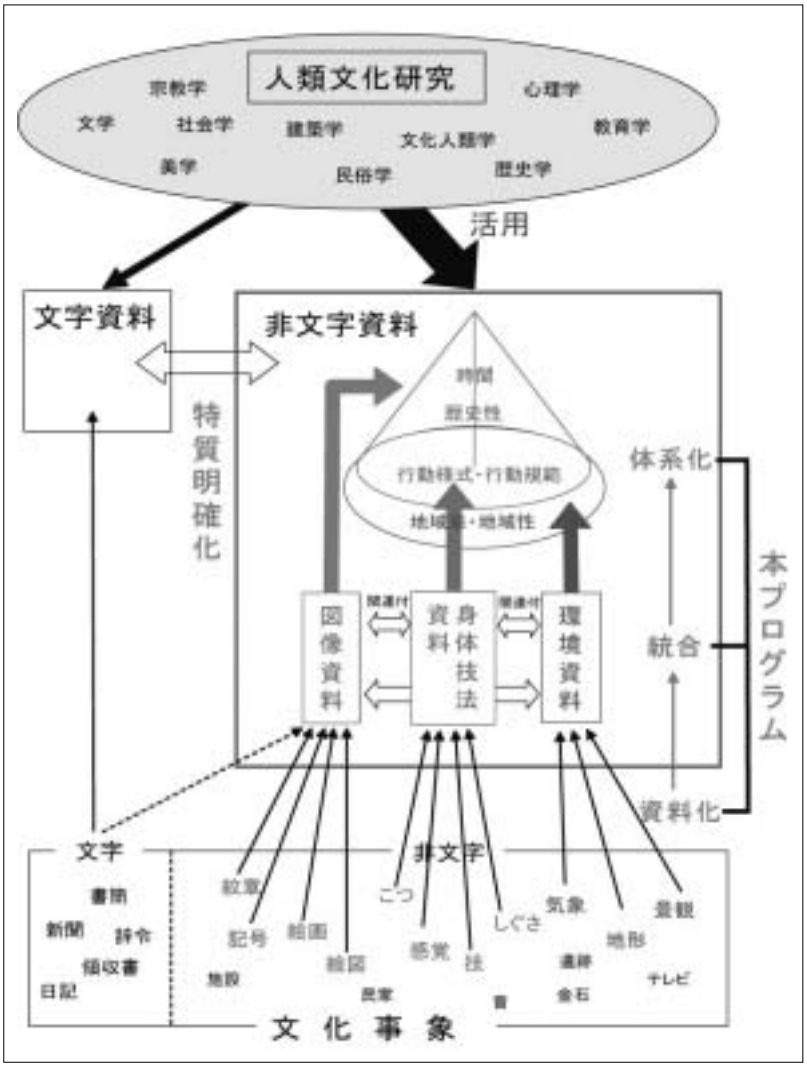
第１部　　研究総括

1　全体構想と研究成果の概要

Ⅰ　研究の目標と課題

本拠点形成計画は、神奈川大学付置の日本常民文化研究所の70年余にわたる調査研究の蓄積と新たな構想の下に1993年設置された大学院歴史民俗資料学研究科の若手研究者養成の実績を基礎に、加えて東アジア研究を進めている外国語学研究科中国言語文化専攻の研究成果を組み込み、文字に表現されない人間諸活動の資料化とその体系化を行うことで人類文化研究の新たな地平を切り開き、世界的に貢献することを課題とする。あわせて非文字資料を解析する若手研究者の育成はもちろんのこと、非文字資料に専ら依拠する博物館専門職員（学芸員）等の高度専門教育の推進を図ることを目的としている。

文字に表現されない人間活動は、文字に記録された世界よりもはるかに広く大きい。その全体を把握し、体系化することは限られた5年間では不可能なことである。研究構想の策定にあたっては、このＣＯＥの5年間で達成できる内容に目標を絞った。すなわち、人間諸活動の表現の中から、①図像、②身体技法、③環境と景観の三つを取り上げ、それぞれの資料化の方法とその解析方法を開発すると共に、資料群をデータとして人類文化を研究する諸学に広く提供する。さらに、それら資料の相互関係を確定し、文化情報発信の新しい技術を開発する。その成果を基礎に、世界的な非文字資料研究センターとして本拠点が永く学術的貢献を果たし、研究と教育を融合し国際的に開かれた大学を追究する神奈川大学の基本方針を具体化することを期した。



研究構想図

Ⅱ　研究組織と活動計画

以上の目標を達成するために研究組織を4班編成にし、研究に取り組み、最終段階でそれらの成果を集約し、研究成果報告書を刊行することにした。そのため、事業推進担当者に加えて、

学内外の専門的な研究者を共同研究員として委嘱し、また独自の構想でＣＯＥ教員（特任教授、非常勤講師）を採用し、合わせて40名に上る研究者を結集した。研究は、大学共同利用機関の共同研究方式を採用した。各班・各課題ごとに研究会を開催し、また全体研究会を開催し、研究の進展を共通のものにする努力を行った。

（１）図像資料の体系化（第１班）

第１に、日本常民文化研究所の先輩たちが刊行した、世界に類をみない『絵巻物による日本常民生活絵引』全５巻を基礎に、本文の英訳及び図のキャプションにフランス語・中国語・韓国語訳を付して、世界的に利用可能なマルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』を編纂・刊行する。

第２に、新たに日本近世・近代生活絵引を編纂する。そのための資料収集と解析（名所図会・農書等の挿絵、風俗画報、絵はがき、絵日記、旅日記、人類学者・民俗学者のスケッチ等多様な図像資料の選択と資料化）を進め、最終年度には『日本近世・近代生活絵引』の第１期（５巻）刊行を開始する。

第３に、日本で考え出された絵引という編纂方式を日本以外の地域で試みる。その手始めとして東アジア生活絵引編纂を構想し、そのための資料収集とそのデータベース化を行うと共に、絵引の試案本を編纂・刊行する。

（２）身体技法及び感性の資料化（第２班）

第１に、身体技法の調査・分析法の開発と身体技法の比較研究を行う。日本・東アジア・ヨーロッパ・アフリカでの現地調査を実施し、例えばオール・櫓・櫂の漕ぎ方に関する身体技法等、具体的動作を設定して、記録・解析し、比較する。

第２に、感性把握の方法論的研究を行う。実験的調査を日本及び世界各地で実施する。

第３に、道具と人間の動作の関係について分析する。日本及び東アジア各地で、農具を中心に悉皆調査を行い、それら用具と身体動作との関連を把握する。その過程で日本で形成された民具という概念を海外の道具も視野に入れて検討する。

（３）環境と景観の資料化と体系化（第３班）

第１に、映像資料による景観の時系列的研究を行う。具体的には、日本常民文化研究所が所蔵する約70年以前に澁澤敬三等によって撮影された映像資料の整備とそれを基にした日本・韓国・台湾の現地調査を実施し、景観の変化を確認する。

第２に、特定地域を定点として設定し、環境認識の伝承とその変遷を長期反復調査によって把握し、分析する。基本的には、猟師・漁師・農民からの聞き書きによる現地調査を実施する。

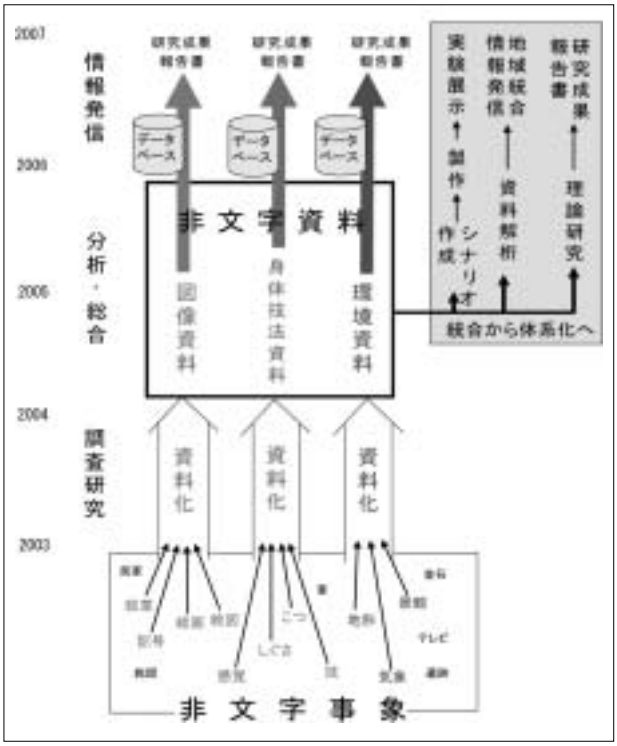
第３は、環境に刻印された人間活動や自然災害の痕跡等を解読する方法の開発とそれに基づくフィールドワークによる資料収集とそのデータ化を行う。

（４）文化情報発信の新しい技術の開発（第４班）

１、２、３班の研究プロジェクトと共同し、非文字資料を文化情報として発信する方法を開発する。

第１に、非文字資料収集・整理・保存システムの構築のための調査・実験及びその具体化を研究する。そして、非文字資料の情報発信技法を開発すると共に、非文字資料のデジタル化の方法を開発する。

第２に、非文字資料を統合して発信する方法として展示を実験的に試みる。あわせて、博物館・資料館に勤務する学芸員・アーキビスト等高度専門職学芸員養成方法の検討を行い、その結果を新システムとして試行する。



研究展開構想図

以上の構想で研究を進めたが、その成果をとりまとめることが射程に入る4年度に、4班の活動をより明確にするために、4班を次のように再編成し、参画する研究者についても全体的に組み替えを行った。

（5）地域統合情報発信（第4班）

図像、身体技法、環境・景観を福島県只見町という一つの地域で統合して、その成果をインターネット博物館としてウェブ上で公開する。

（6）実験展示（第5班）

図像、身体技法、環境・景観を統合する方法として博物館展示の手法を採用し、新たな試みとして展示を実施する。あわせて、非文字資料を扱う高度専門職学芸員養成の方策について検討し、大学院における博物館学芸員養成についての提言書をまとめる。

（7）理論総括（第6班）

非文字の事象を資料化し、それを分析し、体系化する方法に関して理論的諸問題を検討し、個別具体的な研究を総合して全体像を構築する。

このような再編成に加えて、1班から3班までも、班内の各課題の自立性を明確にして、研究成果をとりまとめるようにした。その結果、各班・各課題ごとに成果のとりまとめが行われ、それぞれが研究成果報告書として2007年度末までに印刷・刊行することができた。

Ⅲ　研究成果

共同研究方式によって5年間にわたって研究を展開した。研究過程ではフィールドワークによる調査研究を基礎にし、課題ごとの研究会を頻繁に開催して、共同して研究を推進し、全体研究会で研究の進捗状況について把握し、また互いに理解し、その節目には国際シンポジウムを開催して、研究の進捗状況を報告し、内外の研究者からの批判を仰ぎ、また進展方向について提言を得た。それらは順次ニューズレター、年報などの印刷物として刊行して蓄積したが、最終年度には18冊に及ぶ研究成果報告書としてとりまとめた。また獲得したデータを基礎にデータベースを構築してウェブ上で公開した。

図像、身体技法、環境・景観のそれぞれについて個別の成果をあげただけでなく、当初目標であった、非文字資料を統合し、体系化して発信することを推進した。3つの非文字資料を福島県只見町という特定地域で統合し体系化して発信する地域統合情報発信、また博物館展示という方法によって非文字資料を統合して示す実験展示、そして非文字資料の体系化についての理論総括など、3つの課題を展開した。それらの成果をウェブ上や展示として発信すると共に、その記録を研究成果報告書という印刷物として刊行した。

今回の研究において、図像、身体技法、環境・景観という個別非文字事象については、それぞれの事象の特質に応じて、その資料化の新たな方法を試み、一定の成果をあげることができた。図像についての絵引編纂の試みは、中世の絵巻物にとどまらず、日本近世の図像についても絵引編纂が可能であり、さらには図像の制作・残存において事情の異なる東アジア諸地域においても絵引という編纂方式が可能であり、マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』編纂と共に、図像の資料化、体系化の方法として絵引が有力な方法であることを明らかにした。

身体技法については、資料化がもっとも困難な事象であり、世界各地での調査を実施し、さまざまな試みをした。特に、モーションキャプチャによる記録作成と資料化は今後の研究方法に示唆するところ大であった。また道具・民具が歴史研究の仮説定立に大きく貢献できる可能性も示すことができた。

環境・景観については、現在の地表面に示された景観を過去に撮影された写真・映画などと対比させることで、時間的変化を把握する方法を獲得し、具体的な事例研究で示すことができた。災害、植民地支配などが地表面に残した痕跡を調査し、把握する方法を開拓し、その具体的な研究を日本・東アジア・南太平洋の諸地域で展開した。特に、地震災害についての把握と、そのデータベース化は大きな成果といえよう。

さらに、これら図像、身体技法、環境・景観を統合し、体系化する試みを行い、本プログラムの課題

に迫った。地域の生活は非文字の事象を分断しておらず、相互に関連していることは論を俟たないが、その関係を特定地域で具体的に把握し、ウェブ上で発信するインターネット博物館という形式で示すことができた。また展示が、研究成果を統合して、新たな情報として発信する方法として有効であることを実験展示によって示すことができた。関連して、非文字資料に取り組む博物館学芸員の高度化について検討し、博物館学専攻大学院の設置および歴史・民俗系大学院における博物館関連教育について提言をまとめることができた。

非文字資料を、文字資料と対比しつつ、その特質を明らかにし、個別分野の研究を統合する作業を理論総括研究として行った。非文字の事象についての哲学的思索を重ねると共に、その特徴を描き出すことを試み、大きな展望を得た。

５年間に及ぶ研究事業の中で、若手研究者の育成を重要課題として位置づけ、さまざまな努力を行ってきた。ＣＯＥ研究員制度（ＰＤ・ＲＡ）によって、若手研究者に研究の機会を設け、また種々支援を行った。特に世界的に活躍できる研究者に育てるため、海外の研究機関へ派遣する制度を設け実行した。また基礎的な学力を高めるためにカリキュラムの改定も行い、外国語の習熟を可能にした。さらに、海外の８研究機関とも提携関係の覚書を交わし、研究者、特に若手研究者の相互受け入れを実現した。これらを通して、若手研究者は世界的に活躍できる基礎条件を獲得できたものと判断している。

Ⅳ　非文字資料研究センター

５年間の成果は、人類文化研究を進める諸学に大きく貢献することは間違いないが、さらに研究を深め、また形成した拠点が世界的な研究に貢献するために、非文字資料研究センターを設立して活動することを当初から表明してきた。そのため、最終年度には21世紀ＣＯＥプログラム終了後の継承発展組織について検討し、大学当局の理解も得て、４月から非文字資料研究センターを設立することとなった。非文字資料研究センターは、非文字資料の収集・整理・保存・発信の方法を体系的に開発することと、世界各地の非文字資料研究者や関連する研究機関とのネットワークを形成して、非文字資料研究の情報収集と発信の世界的拠点となることを中心課題とする。

研究成果報告書